

Pre-News Letter No.25

19年 3月19日(月) 発信

Sato Project

Sato Project

農業が環境を破壊するときーユーラシア農耕史と環境ー
「里」プロジェクト

お問い合わせ

総合地球環境学研究所佐藤研究室 (大島) e-mail:mihosma@chikyu.ac.jp

〒603-8047 北区上賀茂本山 457-4 Tel:075-707-2384 Fax:075-707-2508



そろそろ、筍の季節です。

<http://www.kinsuitei.co.jp/3contents/index.html>

「木野皿山の夢のあとーライフスタイルとしての『民藝』」

鞍田 崇(地球研)

「木野皿山の夢のあと—ライフスタイルとしての『民芸』」

鞍田 崇(地球研)

ドイツ語では「農民」のことを **Bauer** といいますが、この **Bauer** の **Bau** は、「建てる」を意味する **bauen** に由来します。現代では、**bauen** はもっぱら建築・建設に関わる単語とみなされていますが、もとは広い意味でさまざまな人為的な営みをあらわす単語であり、家屋を「建てる」ということだけでなく、畑を「耕作する」こと、そして作物を「育成すること」を意味するものでもありました。哲学者M・ハイデガー（1889-1976）はこの点に注目し、建築と農業の両者がいずれも大地と関わることをふまえ、両者を包括するものとしての「住まう」 **wohnen** ということに着目しました。

わたしの専門は西洋哲学（現代思想）ですが、最近の関心は、こうしたハイデガーの視点をうけとめつつ、ライフスタイル・デザインの現在あるべき姿を明らかにしていくことにあります。そのさい、近現代の建築や工芸をめぐる様々な議論が手がかりになると思われます。なかでも 19 世紀後半のイギリスのW.モリス（1834-1896）らを嚆矢とするアーツ・アンド・クラフツ運動の展開、アール・ヌーヴォーやドイツ工作連盟、アール・デコやバウハウス、なにかんづくわが国の民芸運動に注目しています。

現在ではお土産の代名詞のようにもなった「民芸」という言葉が、もとは「民衆工芸」の意からの造語であり、柳宗悦（1889-1961）らの「民芸運動」にひるがえるものであることは、多くの方がご存知かと思ひます。一般に民芸運動とは、「伝統の中で形作られた古い民藝品を発掘・蒐集し」、「用の美を世に紹介し広めようとする活動」とされますが（日本民藝館HP）、この運動の射程はただ伝統的な民芸品の復興・再評価にとどまるものではなく、近代社会に対する批判意識に根ざした、あらたなライフスタイルの模索にあつたと考えられます。民芸運動にかかわる面々が住空間にも関心を示し、建築や室内デザインを手がけていたことは、そうした点を端的に示すものといえるでしょう。

ところで、地球研のすぐ近くにも、そんな民芸ゆかりの建物があるのをご存知でしょうか。今日はそれについてお話ししたいと思います。

地球研の北側、京都精華大の界限は、旧鞍馬街道ぞいの木野という古い集落で、叡山電車の木野駅周



(叡山電車・木野駅)

辺を歩くと、いまでも昔ながらの石垣や土壁の田舎家が軒をつらねているのを見ることができます。

木野駅から旧街道を東へ歩くと、竹林の中に、ほかの民家とはいささか趣の異なる紅殻塗りの日本家屋が何軒か並んでいるのが目に入ってきます。紅殻塗りのうちには、「松乃鰻寮」という看板をかかげている建物もあります。うなぎ料理で有名な料理屋で、なかなかお高いお店らしいです。



(木野の竹林)

残念ながら今日は

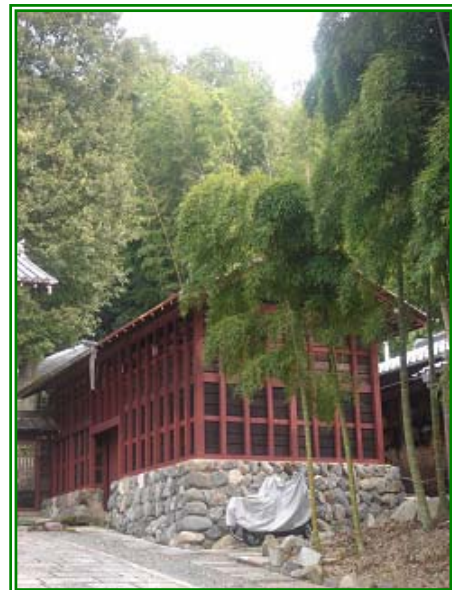
(木野の家並み)

こちらにはうかがいませぬ。



目を転じると、赤い納屋があり、ちょっと奥まったかたちで、たいへん立派な長屋門がそびえるように立っているのに気がつきます。威風を払うといいますか、何かちがう独特な雰囲気をもっています。はじめて目にしたときは早春の雨が煙る中、幻想的でした。

そうしてそのまま誘われるように、ふらふらと石段を登り、開けられたままの通用口から、思わずそっと中をのぞき見てしまいました…。こういうのを邂逅というのでしょうか。そこで見た建物がなぜか忘れられず、後日あらためてお訪ねし、ひとりでお住まいのおばあさんからいろいろお話をうかがうことができました。



(上田恒次邸・納屋)

この家のもとのあるじは、陶芸家の上田恒次(1914-1987)。烏丸三条で呉服を商っていた大店の生まれですが、陶芸をこころざし、河井寛次郎(1890-1966)のもとに入門、師の技術をうけつぎながら、端正で清潔な中にあたたかみのある白磁や呉須(ごす)・辰砂(しんしゃ)、練上(ねりあげ)を得意としました。民芸運動の担い手でもあった寛次郎をつうじて、柳宗悦や濱田庄司(1894-1978)、富本憲吉(1888-1963)といった人びとの知遇を得、京都民芸協会の会長もつとめています。錚々たる面々との交流もあって、陶匠として一家をなした恒次ですが、その原点ともいべきものは、やきものではなく、じつは建築にありました。



(上田恒次邸・長屋門)

陶工を志した19歳のころ、恒次は入門を請うて、くりかえし五条坂の寛次郎宅(現・河井寛次郎記念館)を訪ねたそうです。しかし、寛次郎は門人をとらないたてまえで、その請いを聞き届けようとはしませんでした。ところがある日たまたま、理想とする自宅工房を描いた図面を持参したところ、寛次郎の心にかない、以来彼のそば近くで陶工修行にいそしむこととなります。この図面がなければ、のちの恒次は存在しなかったといってもいいでしょう。



(夏の主屋外観 木造一部二階建)

弱冠19歳で、寛次郎を納得させた職住プランを有していたことには驚かざるをえません。

じつは、恒次の師である寛次郎もまた、自宅工房の設計をみずから手がけています。富本にせよ、柳にせよ、民芸をになった人々はただ工芸作品の作り手やコレクターであっただけでなく、たえずそれらがじっさいに使われる空間

を意識し、あるべき空間構成とそこでいとなまれる暮しの〈かたち〉の模索をつづけてもいました。寛次郎が、恒次の住宅図面を見てはじめて入門をよしたのも、言葉にはならずとも、目指されるべきものが何なのかについての自覚をそこに見出したからだったのかもしれない。

寛次郎の判断はあやまっていませんでした。恒次は、この図面をたんなるプランでおわらせるのではなく、文字通り自らの手で現実のものにしていきました。大工仕事も鋺（こて）の扱ひも素人ながら、あの図面にしたがって、木を切り、壁を塗り、家屋はもちろん登り窯まで、すべてみずから築きあげています。主屋と登り窯の完成は昭和 12 年（1937）。上田恒次 23 歳の作——



（登り窯）

これが、現在も木野に残る上田邸なのです。のちに評論家・保田與重郎（1910-1981）はこう言っています——「此の家に私は驚嘆した。其れは芸術とか作品と言われるもので、私の最も驚嘆した現代の創造物の一つである」、と（民芸手帖 No.52, 1958）。いくぶん視点は異なりますが、このように絶賛する彼の感動は理解できます。

いわゆる京町家ではない質実な民家風でもあり、そうかと思えば瀟洒な山荘風でもある趣、さらに、通りに面して石段の上に立派な長屋門をかまえていることもあって、木野の上田恒次邸はひとの目をひきつけずにはおきません。しかし、土地の文脈から切り離された、孤立した姿を呈しているわけではありません。長屋門も威圧的な印象を与えることはまるでなく、むしろ周囲の家並みや山懐の風景にしっくりととけこんでいます。天井には近くに繁茂する竹を活用するなど、立地環境を意識した仕上がりからは、視野狭窄になりがちな勢いだけの理想家の作品とはことなる、現場の状況をふまえた柔軟な思考の所産であることをうかがうこともできます。また、かつて木野の家々が、御所に献上する素焼きの「かわらけ」を産していたことを踏まえれば、この地に窯を築くという発想そのものも、同様に土地の文脈に即したものであったといえるでしょう。ほかとはちがう個性を有しながら、けっしてほかから隔絶しない……はじめてこの家を目の当りにしたときに魅了され、いまもなお訪ねるたびに再確


認するのは、何よりもこの絶妙なバランス感覚にあふれた家屋のもつ独特な雰囲気なのです。

現在おひとりでこの上田邸に住むおばあさんは、恒次さんの奥さまです。嫁いでこられたときにはもうこの建物ができあがっていたそうです。なき夫の作品に文字どおりつつまれて、もう 80 歳を越えてらっしゃいますが、たいへんお元気で、いつお訪ねしてもにこやかに迎え入れてくださいます。その笑顔に会いたくて、思わず訪ねてしまう場所でもあったのです。

(主屋 客間 いまも恒次の作品がならぶ)



※上田邸のうち主屋と登り窯は、昨年 3 月、登録有形文化財に登録されました。

 この度プレニューズレターも第 25 号を迎えることができました。これもひとえに原稿をご執筆いただいた方々のお陰と、大変感謝いたしております。さて、地球研が新舎屋に引越しして早 1 年が過ぎ、プロジェクトも次第に歯車が動き出しています。

そして、佐藤プロジェクトもより一層活発にしていける一助となれるよう、冊子になる前段階としての「プレ」、佐藤プロジェクトの活動をいち早くお知らせする「プレ」を取り、ニューズレターとして皆様へ配信していきたいと思っております。今後ともどうぞよろしく願いいたします。

ニューズレター担当(大島)